

宮城道雄と仁川(1)

「春の海」など沢山の箏の名曲を生み出し「邦楽の父」とも呼ばれる作曲家の宮城道雄が仁川に住んでいたことは案外知られていない。筆者自身も知ったのはほんの10年ほど前である。

かつて仁川から引き揚げてきた人たちが仁川会という組織をつくり、ほとんど毎年会合を開いていた。みなさん高齢者となり現在は解散状態になったが、最後のころ魚住昭典さんという方が世話役をされていた。仁川・浜町にあった魚住写真館の息子さんで、戦後は航空自衛隊で活躍された人だった。その魚住さんがあるとき「姉さんが仁川で宮城道雄に直接箏を習っていた」と言われたので、驚いた。「宮城道雄は仁川のどこに住んでいたのですか」と尋ねると「旭国民学校の校門の横に長屋があり、そこに住んでいたそうです」と答えられたので2度びっくりした。筆者が住んでいた所と70メートルくらいしか離れていなかったからである。

宮城道雄といえば、私事ながら鮮烈な思い出があった。筆者は広島県三次市吉舎町の日彰館高校で学んだが、1年生だった昭和29年の7月ごろ、3年生を中心に文化祭で木下順二の「夕鶴」を上演する計画がもちあがった。「夕鶴」は昭和24年に発表された戯曲で、主役の「おつう」を演じることを許されるのは大女優の山本安英だけということもあり評判になっていた。プロではなく高校生なので日彰館での上演が認められたのだと思われる。文芸部に入っていた筆者にも協力の依頼があった。

会合に出てみると、「おつう」の役を演じるのは3年生の川井小由女さんだった。現在、日展理事長として大活躍しておられる人形作家・文化功労者の奥田小由女さんである。

裏方は担当分野ごと数人ずつに分かれたが、筆者はなぜか音響分野だった。文芸部顧問だった森永泰輔先生が生徒5、6人を集め「セリフだけでは寂しい。合間に流す音楽がほしい。自宅からこの劇に合うと思うレコードを持ってきてくれないか」と頭を下げられた。今では団伊玖磨作曲のメロディーがつきものだが当時はまだ決まったものはなかった。筆者は自宅にあったレコードのうちクラシック2、3枚と「春の海」など宮城道雄の箏曲3、4枚を持参した。

全部で14、5枚集まったレコードを順番に聞いていた先生は、宮城道雄の「瀬音」を耳にした途端「これだ。この曲がぴったりだ」と「瀬音」を選ばれた。川のせせらぎをイメージして作られた曲である。そして持参した筆者が音響の責任者になった。先生は「このセリフの後には「瀬音」のこのメロディー、このセリフの後はこの部分と次々決めていかれる。今ならテープを使って簡単にできるが、当時はそうはいかない。必要なときにメロディーが刻まれたところにレコード針を落とさなくてはならない。SP盤だからよく見るとメロディーによって波形が変わっているのが分かった。それを頼りに作業することにした。リハーサルの度に夜遅くまで練習した。

娯楽が少なかった時代ということもあり、11月はじめの文化祭当日は大勢の観客がやってきた。講堂は立錐の余地もなく外にあふれていた。それでも川井小由女さんたち役者の声はよく通り、楽屋の裏にもはっきり聞こえた。森永先生は蓄音機を回し続けている筆者の横に立ち、音楽の出番になると「ハイッ」「ハイッ」と合図される。盤面をみつめながら、間違えないよう必死に作業していると、2時間たらずの劇は終わった。

今から振り返っても劇中に音楽を流すという発想は素晴らしいし、「瀬音」もよく合っていた。川井小由女さんはその日から町中の人気者になった。しかし筆者は川井さんの舞台姿を一度も覧ることができなかった。「瀬音」のメロディーは最初から最後まで覚えており、宮城道雄は非常に近い存在だったのである。その宮城道雄が仁川に住んでいたとは。しかも筆者の住んでいた所の近くに住んでいたとは。本当に驚いた。

宮城道雄と仁川(2)

作曲家の宮城道雄は明治27年(1894)4月7日、神戸市三宮の居留地で菅国治郎とアサの長男として生まれた。父親は広島県福山市鞆の浦出身で道雄の生誕地は現在、三井住友銀行神戸本部ビルの一部になっている。しかし生後200日ごろ目を患った。4歳のとき母と離別、祖母に育てられた。目は一向に良くなり、7歳のころほぼ失明状態になった。

ただ道雄が後に書いた随筆によると完全に失明したのは 20 歳のころだったようだ。

息子の将来を案じた国治郎は、道雄が 8 歳のとき神戸の生田流箏曲の 2 代菊仲検校に弟子入りさせ、箏を習わせた。箏の天分があることを見抜いた兄弟子たちは、神戸で最も厳しい教え方で知られた中島検校に師事するよう勧めた。そこで 2 代中島検校に弟子入りした。評判どおりの厳しい教え方で、どんなに寒い冬でも窓を開け放して弾き指を鍛える訓練もした。2 代中島検校は 2 年後病死したので 3 代中島検校に師事した。努力が実って 11 歳で免許皆伝になり、師匠の代稽古を勤めるまでになった。

しかし父国治郎が事業に失敗、伊藤博文統監の積極経済で沸く韓国・仁川に出稼ぎに行った。ところが暫くして送金が途絶え、父は賊に襲われ重傷を負ったという連絡が入った。道雄は明治 40 年(1907)9 月、祖母のミネ、弟の克二とともに仁川に向かった。道雄は中菅道雄と名乗っていた。師匠の中島検校の中という字をもらい本名の菅に付けた芸名である。

一家が仁川で居を構えたのは寺町(のち旭町)の小学校校門横の平屋で四畳半と六畳の二部屋だった。道雄は家計を助けるためすぐに箏教授の看板を掲げた。仁川で箏を売っていた阿部商店が道雄の境遇に同情し、有力者の奥さんに頼み込んで弟子を集めてくれた。それだけでは心許ないので夜は自己流で覚えた尺八を旦那衆に教え始めた。ただ長時間労働で居眠りすることがあり、怒って辞める人が何人かいた。父と道雄はその人たちの家を回り、謝罪して継続してもらった。最初は少なかった弟子の数は次第に増え、道雄は「学校の下の子少年先生」と呼ばれるようになった。生田流は関西中心の流派だが、弟子のなかには既に関東の流派である山田流の箏曲を習った人がいて、道雄はその人から「小督」(こごう)、「熊野」(くまの)など山田流の名曲を逆に教えてもらったりした。

慣れてくると、それまでに在った箏の曲だけでは物足りなくなってきた。なんとか新しい箏曲を自分の手で作曲してみたいと思い始めたのである。神戸の繁華街のレコード店で聞いた西洋音楽が耳にこびりついていた。

道雄は学校に行っていなかった。その代わり弟の克二が勉強する横に座り、教科書を声を出して読んでもらってその内容を知り、学んでいた。弟が尋常高等 2 年(現在の小学 6 年)のときの「高等小学読本」の中に、大和田建樹作の「水の変態」という七首の短歌の連作があった。水が気象の変化に伴って霧、霰、雲、露、雨、霜、雪と姿を変える様子を詠っていた。道雄はこの水の変化を箏曲で表現してみようと思いついた。

曲想を練り、毎日のように弾いては直し、弾いては直して納得がいく曲が出来上がったのは 30 日後だった。処女作の「水の変態」が完成したのだった。従来の箏曲とは異なり、西洋音楽の要素も取り入れた画期的な曲であり、明治 42 年(1909)、満 14 歳のときだった。今でも道雄の代表作の一つとされている。

宮城道雄と仁川(3)

「水の変態」を作曲して間もない明治 42 年(1909)7 月 14 日のお昼前、弟子の一人である仲町の浅岡旅館の女将が道雄の家に駆け込んで来た。「大変よ、大変。伊藤の旦那が先生の演奏を聴きたいとおっしゃっている。今日の夕刻、うちの旅館に来てちょうだい」。伊藤の旦那とは伊藤博文統監のことだった。

伊藤統監は仁川が好きでしょっちゅう訪れ、浅岡旅館を定宿にしていた。女将は機会があるごとに天才少年の存在を統監に話し、統監も関心を示していた。伊藤は 4 年勤めた統監を辞任すると決意、韓国での最後の夜を仁川で過ごすことにして、評判の道雄を招いたのだった。

突然の連絡を受けた道雄は驚き困惑した。なにしろ偉い人の前で演奏するのに相応しい箏を持っていない。着ていく服もない。まず弟子の家を何軒か回って頼み込み箏は借りることができた。問題は着るものである。急なことであり、仕立ては間に合わない。そこで義母が、男が着てもおかしくない柄の自分の古い着物を肩上げし、腰上げして着せてくれた。

伊藤統監と送別のために仁川に来た統監府の高官の前で道雄は最初古典的な箏の曲を弾いた後、自分の処女作である「水の変態」を心をこめて演奏した。最後の音を聞き終えた伊藤統監は「少年ながら、こんな曲を作るとは実に見事である。こんな所にくすぶってないで東京に出て勉強したらどうだ。俺が応援してやる。仁川には近くまた来るからそのと

き連れて行ってやる。心の準備をしておけ」と言った。

天にも昇る気持ちだった。東京は憧れの地であり、いずれは行きたいと思っていた。それがこのような形で実現するとは。道雄は数十日を夢見心地で過ごした。

ところが4ヶ月後の10月26日、ハルピンを訪れていた伊藤博文は安重根によって暗殺されてしまった。道雄の夢は一瞬のうちについでしまったのである。「人に頼っていたのではダメだ。自分の道は自分で切り開かねばならない」と道雄は覚ったのだった。

それからの道雄は積極的に演奏会を行うようになった。伊藤統監と一緒に演奏を聴いた高官の支援もあって京城の統監府、鉄道管理局、キリスト教青年会などで次々演奏、名前が知られるようになった。京城音楽堂建設資金募集の音楽会にも再三出演した。

明治43年(1910)8月、日韓併合が決まると韓国の貴族のなかには不満を抱く人が大勢いた。第3代統監から初代総督就任が内定した寺内正毅の夫人は、貴族たちの不満を少しでも解消しようと李王妃はじめ多数の貴族夫人を招いて総督就任披露の宴を催した。余興の演奏者として道雄が指名された。道雄の演奏の素晴らしさに一同は感嘆、道雄の名は朝鮮中に知れ渡った。

道雄は間もなく、3年を過ごした仁川から京城に居を移した。大正2年(1913)、入り婿の形で喜多仲子と結婚、生活はようやく安定した。そうして仲子の生家である宮城の姓を名乗るようになった。

宮城道雄と仁川(4)

宮城道雄と名乗り始めて暫く経ったころ、熊本からやってきた琴古流尺八奏者の吉田晴風と巡り会った。吉田は3歳年上で熊本在住の地歌名人、長谷幸輝に可愛がられ、尺八名人を目指していた。邦楽の将来について語り合える友を得たのだった。道雄は朝鮮に渡った後も時々神戸に行き旧師の3代中島検校に教を請うていたが、ついでに熊本の長谷名人のもとにも通い研鑽を積むようになった。こうした努力で大正5年(1916)には大検校の称号を授けられた。

吉田晴風は大正4年、新しい活躍の場を求めて上京、道雄にも上京を促す手紙を何度も寄越した。道雄は妻が病気がちだったためなかなか決断できなかったが同6年、長い間憧れていた東京にようやく居を移した。しかし妻仲子には無理だったようで、上京後まもなく死亡した。

東京での生活は目まぐるしく、作詞家で教育者の葛原しげる、作詞家で国文学者の高野辰之、評論家の山田源一郎、音楽学者の田辺尚雄らとの交流がすぐに始まった。彼らの後押しにより同8年、本郷春木町の中央会堂で第1回作品発表会を開催、作曲家として本格的デビューを果たした。この間、吉村貞子と再婚している。貞子の姪の牧瀬喜代子、数江姉妹はのちに入門、宮城の姓を名乗って道雄の後を継ぐのである。また夏目漱石門下の小説家、内田百閒が入門し、随筆の師匠になった。

9年11月には本居長世とともに合同作品発表会を開いた。このとき尺八演奏を担当した吉田晴風が「新日本音楽大演奏会である」と宣伝、新日本音楽という言葉が流行語になった。邦楽と洋楽を融合させた新しい日本音楽を創造する運動が始まったとされ、道雄、長世、晴風がその旗手であるといわれるようになった。

作曲では葛原しげるの影響で一時期子供向けの童謡作りに精力を割いていたが大正12年、「さくら変奏曲」「瀬音」を相次いで発表、評価が一気に高まった。大正14年のJOAKラジオ試験放送では初日に道雄の演奏を放送、以後、正月には必ず道雄の箏曲を流すのが慣例になった。

昭和4年には名曲「春の海」が完成、来日したフランスの女流バイオリニスト、ルネ・シュメーが尺八部分をバイオリンに編曲して道雄と合奏、これがレコードになって世界中に販売され、道雄の名は国際的に知られるようになった。

「春の海」は道雄が瀬戸内海を旅したときの印象をもとに作曲した、というのが定説になっている。しかし筆者は、仁川の海の印象も込められていると思う。道雄の自叙伝「私の若い頃より」に書かれているように、仁川の冬は卵が凍り、殻を割ってもお膳の上を転がるほどの寒さだった。漬け物を噛むとシャリッと音がし、夜眠っているうちに自分の息が布団

の襟に凍り付く。筆者も体験もしているが遅い春がやってきたときには開放感がある。日本公園から眺めた仁川の海の穏やかな波は忘れられない。宮城道雄もきっと同じ体験をしているに違いないのである。

宮城道雄と仁川(5)

宮城道雄は多才な人だった。作曲した曲は 400 曲を超えており、このうち 100 曲くらいが葛原しげるの影響で「わらべ歌」である。「ぎんぎんぎらぎら夕日が沈む」で有名な「夕日」をはじめ、「キューピーさん」「村祭り」「とんび」「白兔」など今なお歌い継がれている曲も多い。当時はピアノがなく、歌の伴奏は箏で行われていたという時代背景があった。

随筆家としての評価も高い。三笠書房から昭和 10 年に出版した「雨の念仏」、翌年の「騒音」、31 年の「あすの別れ」などは好評で、同社は 32 年、「宮城道雄全集」全三巻を出している。師匠にあたる内田百閒はもちろん川端康成や佐藤春夫も絶賛していた。盲人独特の感性による状況説明が非常に平易な口語体で表現されているからだった。また古典楽器の改良や新楽器の開発を行い、十七弦、八十弦、家庭用の箏である短琴、大型の胡弓などを発明した。昭和 12 年には東京音楽学校(現東京芸術大学)教授に就任、同 23 年には日本芸術院会員になった。25 年には第 1 回放送文化賞を受賞した。

昭和 31 年 6 月 25 日午前 3 時半ごろ、愛知県刈谷市の刈谷駅近くを走っていた下りの貨物列車の乗務員が、名鉄三河線と立体交差するガード付近の線路の横に人が倒れているのを見つけ、「死体がある」と刈谷駅に連絡した。駅員が数人で駆けつけるとその人は動いており「どこかへ連れて行ってください」と頼んだ。駅員たちは担架を取りに駅に戻り引き返してみると、膝を抱えるようにして座っていた。担架に乗せて 500 メートル離れた豊田病院に 40 分かけて運んだが、その間「ここはどこですか」と聞き「刈谷だ」と答えると「では名古屋に近いですね」と会話している。また「私は列車から落ちたのでしょうか」と問いかけたり「病院はまだですか」など話しかけたりした。

病院では「宮城道雄です」と漢字の説明をしながら名乗った。有名人だったからすぐに国鉄と警察に連絡、貞子夫人には午前 5 時に知らせが入っている。豊田病院では警察官の献血で輸血をするとともに 6 カ所の裂傷を 25 針縫っている。しかし午前 7 時 15 分死亡した。

宮城道雄は内弟子の牧瀬喜代子が付き添って公演のため寝台急行「銀河」で大阪に向かっていたところだった。列車が現場を通過したのは午前 2 時 35 分ごろで時速 90 キロのスピードだった。病院で手当を受けるまで事故から 1 時間半以上が経過していた。

この事故については、トイレに行こうとしていた道雄が誤って入り口のドアを開け転落したという単純事故説、自殺を図ろうとしたという自殺説があり真相不明とされている。ただかつて 10 日間箏の手ほどきを受けたことのある女優の高峰秀子は、「階段から転げ落ちる道雄を何度も目撃した」と証言、「先生は列車のデッキから落ちられたのだ」と語っており単純事故説が有力である。警察は自殺説を採っている。国鉄はこの事故の後、走行中は客車のドアが開かないよう車両を改造した。

現在、事故現場近くに宮城道雄をしのぶ供養塔が建てられている。命日の 6 月 25 日は遺作の歌曲にちなみ「浜木綿忌」とよばれている。

古賀政男と仁川(1)

「古賀メロディー」と愛称され、日本人の心に残る名曲を数多く作った古賀政男も仁川に 2 年ばかり住んでいた。それも、宮城道雄が住んでいた場所とも筆者が住んでいた場所とも極めて至近距離だったようである。

古賀政男は日露戦争が始まった年である明治 37 年(1904)11 月 18 日、福岡県三潴郡田口村(現大川市)で古賀喜太郎、セツの五男として生まれた。本名は正夫だが、ここでは作曲家名である政男に統一する。父喜太郎は茶碗や皿など

陶器の行商をしていた。生活は苦しく、母セツも近所の農家の手伝いをしていた。家計を助けるため、長兄福太郎は政男が生まれる前の年、小学校卒業と同時に朝鮮の仁川に渡り、金物商の徳本商店に丁稚奉公に出た。当時の小学校は4年制だから満10歳である。次兄時太郎も39年、徳本商店に奉公に出た。明治40年から小学校が6年制になり、三兄金蔵は小学校卒業を待って12歳でやはり徳本商店に奉公に行った。

政男が6歳になった43年3月、父喜太郎が病死、母セツは農作業手伝いのほか畳表を織る作業にも従事したが生活は苦しいままだった。そうしたなか、政男は44年4月、田口村尋常小学校に入学した。それから間もなく祖母八尾(喜太郎の母)が病死、一家は必ずしも田口村に住み続ける必要はなくなった。しかし母セツはなんとか田口村で頑張っていること懸命に努力していた。

明治45年3月、四兄久次郎が小学校を卒業、やはり徳本商店に奉公した。四人の男の子を就職させた徳本商店と古賀家がどのような関係だったのか、今となっては判然としない。政男の自伝「我が心の歌」では親戚と書かれているからそれが定説になっている。しかし旭小学校、仁川中学で学び、明治大学を卒業して先輩の古賀政男を詳しく調べた魚住昭典氏によると「親戚というのは間違いであろう」と仁川中学の同窓会通信1991年12月号で断言しておられる。徳島県鳴門市にお住まいの徳本家のご子孫の電話番号まで記載しておられるから、詳細に調査した結果の結論と思われる。確かに四国の徳本家と九州の古賀家が親戚になるとは考えにくい。

魚住氏の推測では、仁川で大きな農機具商を営んでいた草刈兵衛氏が母セツの従弟に当たっており、草刈氏が懇意にしていた徳本氏に紹介したのではなかろうか、としている。

転機は明治45年にやってきた。久次郎が仁川に渡ってまもなく、古賀家は泥棒に入られ、めぼしいものをごっそり盗まれた。追い打ちをかけるように家が放火され、丸焼けになった。万策尽きてセツもまた徳本家というより四人の子供を頼りに仁川に渡ることにしたのだった。

明治天皇が崩御され、年号が大正と変わった8月、セツと長女ふじ子、政男、六男留吉の四人は田口村を出発、関釜連絡船、京釜鉄道、京仁鉄道と乗り継いで3日ばかりで下仁川駅に到着した。到着時間を知らせていたにもかかわらず、駅には誰も迎えにきていなかった。

古賀政男と仁川(2)

小学校2年生だった古賀政男と母セツ、姉ふじ子、弟留吉の4人が長い旅を終えて朝鮮仁川府下仁川駅に到着したとき、駅に出迎えの人は誰もいなかった。「おかしいな、到着時間は知らせているのに」とセツは不安を感じたようだ。同じ列車で着いた人たちはそれぞれ出迎えた人と一緒に去っていくのを見送り、暫く待ったあと使いの者を徳本商店に出した。

30分ほどして政男の三兄金蔵と四兄久次郎がやってきた。政男たち4人の荷物は小さな柳行李一つ。その荷物は久次郎が担ぎ、一行は中華街の坂を登って本町に入り、大きな門構えの徳本商店に到着した。経営者である徳本宗吉氏の指示とかで4人は奥の座敷に通され、お茶が振る舞われた。長兄福太郎と次兄時次郎も出てきて家族8人が初めて顔をそろえたのである。家長になったつもりなのか福太郎が他人行儀な挨拶をした。政男には「人間辛抱が大事だぞ」と言った。

そこに主の徳本宗吉氏が現れた。セツが4人もお世話になっているうえ今回また厄介かけますと挨拶すると徳本氏は苦勞人だけあって「みんなよく働いてくれています。それにしても7人の子宝に恵まれるとは羨ましい」とソツなく応えた。

丁度そのとき、女中に案内されてセツの従弟、草刈兵衛氏が頭に赤いリボンをつけた女の子を連れてやってきた。草刈氏は仁川でクリーニング店を皮切りに事業を始め、農機具販売に転じて成功、朝鮮半島全域を商圈にする問屋兼小売りの草刈商店を経営していた。セツが会うのは十数年ぶりだった。

2人の近況報告が一段落したのを見計らって福太郎が「草刈さんところの春江ちゃんですよ」と女の子を紹介した。春江が「みなさん、いらっやいませ」とよどみのない標準語で言いお辞儀した。福太郎は今度は政男の方を向き「春江ちゃ

んはおまえと同じ歳だよ」と言い春江に「仲良くしてやってね」と頼んだ。春江は「こちらこそ、よろしくね」と返事したが、顔を真っ赤らした政男は「うん」としか言えなかった。

全国各地から朝鮮半島に渡った日本人は、お互いの意思疎通を図るため標準語を使うというのが暗黙の了解事項になっており、日常会話は標準語だった。春江が標準語を話すのは当然だが、九州から来たばかりの政男にとっては別世界の人のように思えた。しかも顔は整っており、利発そうだった。古賀政男が生涯憧れ慕い続けた草刈春江との最初の出会だった。

草刈父娘が帰った後、九州からやってきた 4 人の今後の暮らし方が話し合われた。働き者のセツは「何でもやりますから」と徳本氏に頭を下げ、掃除婦として働くことになった。問題はどこに住むかだった。徳本商店の敷地内には従業員用の建物が何棟か建っていたが社業繁栄で手狭になっていた。しかも福太郎は 9 月に結婚を控えていた。屋敷内に住むのは無理ということで、4 人はどこか借家を見つけてそこに居を定めることになった。

古賀政男と仁川(3)

古賀政男と母セツ、姉ふじ子、弟留吉の4人は徳本商店で 2 泊したあと仁川・寺町(のち旭町に町名変更)の借家に住みはじめた。古賀政男は自伝の中で「寺町小学校の正門の横。前は広い草原だった」と書いているがはっきりとは分からない。しかし古賀政男について詳しく調査した元仁川会世話人の魚住昭典氏は「正門に向かって左側だった」としている。宮城道雄が住んでいた家とは門をはさんで 2、30 メートルしか離れていない。いずれにせよ古賀政男の住んだ家はその後取り壊され、昭和 6 年の運動場大拡張の際、埋め立てられて運動場になったようだ。

政男は大正元年(1912)9 月の二学期から寺町小学校に転入学した。同じ学校で同学年の春江を意識して勉強に励み、たちまちトップクラスになったようだ。一方母セツは、長男福太郎の嫁との仲がうまくいかず、徳本商店での仕事も骨が折れるものだった。その影響で、心の安らぎを得る場所として草刈家を訪問し過ごす時間が増えた。そのときは政男も同行、自然に草刈兵衛の長男の良介や春江と仲良くなっていった。良介は政男や春江より 3 歳年上だった。

良介は流行しはじめたばかりの大正琴を持っていた。3 人は大正琴を弾きながら一緒に歌を歌っていたが、弾き方が上手いのは政男だった。当時の大正琴は金属製の弦が 2 本で、鍵盤により音高を定めて義甲で奏でる。弦が金属だから音域が高く、政男が弾くと哀調を帯びた絶妙なメロディーになるのだった。そうしてある日良介が言った。「下手な者が持ってもしょうがない。この大正琴、政男ちゃんにあげるよ」。春江も横から口をだした。「お兄ちゃんの言うとおりの。もらっちゃいなさい」天にも昇る心地だった。

それからの政男は大正琴の練習に励んだ。寺町小学校のすぐ隣というのは好都合だった。近所迷惑にならないよう、校庭の片隅や校舎のうしろでじっくり練習できるからだった。新しい曲をマスターすると草刈家に行き、良介と春江の前で演奏した。政男にとっては春江に会うのも目的だった。ところが珍しく母の元に来た福太郎がこの大正琴に気がつき、「こんな高価なものを貰っては駄目だ。返せ」と政男の手を引っ張って草刈家を訪問した。しかし良介は「ボクはもう弾かないから、弾ける人が使えばいいんだ」と福太郎を説得してくれた。

そうこうしているうち、政男を最も理解し応援してくれるたった一人の姉ふじ子に結婚話もちあがった。草刈商店の番頭、永島米蔵が宮崎県の都城に草刈商店の支店を出すことになり、世帯持ちの方がいいということでふじ子に白羽の矢が当たったのである。世話になっている草刈兵衛の頼みとあっては断ることはできず、ふじ子は大正 2 年、あわただしく結婚式をあげ、都城へと旅だつていった。このときの印象を古賀政男は後年、西条八十に作詞してもらった「誰か故郷を思わざる」のなかでこう表現している。

「ひとりの姉が嫁ぐ夜に 小川の岸でさみしさに 泣いた涙のなつかしさ 幼馴染みのあの山この山 ああああ 誰か故郷を思わざる」

古賀政男と仁川(4)

古賀政男の長兄福太郎は、番頭としての働きが認められ徳本商店からのれん分けのかたちで京城(現ソウル)に店を出すことを許され、大正 3 年(1914)8 月、古賀商店が南大門通りに誕生した。母セツと 6 人の子供、長男の嫁、8 人が一緒に京城に住むことになった。4 年生だった政男は 2 学期から仁川を離れ、南大門小学校に転入した。仁川での生活はちょうど丸 2 年だった。

一家は全員そろったものの、セツと長男の嫁との対立はひどくなり、次男が結婚した相手は長男の嫁の妹だったから母は二人の嫁との争いになった。そこでセツ、政男、留吉の三人は南山の麓の借家に別居した。政男はまたも西大門小学校に転校している。古賀商店はその後第一次世界大戦の景気に乗って従業員 60 人を抱える企業になっている。大正 8 年には大阪市西区阿波座に大阪支店を開設、二兄、三兄、四兄が勤務している。

政男は大正 6 年、小学校を卒業、草刈良介が通っていた京城中学への進学を希望した。しかし長兄福太郎は「商人の子弟は商業学校に行け」と命令、善隣商業に進んだ。大倉喜八郎が創設した商業学校の名門だったが、政男は音楽と文学に力を注いだ。大阪の四兄久次郎からマンドリンが送られてきたのを契機に、マンドリンに集中するようになった。

大正 11 年春、善隣商業を卒業すると福太郎は大阪支店で働くよう指示した。政男は「いずれは東京の大学に行こう」と思っていたから東京に近いと自分を納得させ承知した。京城を離れる前、仁川の草刈家を訪れている。

大阪支店では主として輸出入手続き業務を担当した。月給は 5 円。上京に備えてできるだけ使わないよう心懸けた。そうして 10 ヶ月経った 12 年 2 月、支店をこっそり抜けだし上京、早稲田大学に通っていた草刈良介の千駄ヶ谷の下宿に転がり込んだ。なんとか音楽大学に入ろうと受験勉強をはじめた。しかし商業学校卒には受験資格がなく、やむをえず明治大学商学部予科に入学した。入学早々、マンドリンクラブ創設に参画、中心メンバーになっている。

その夏、母セツから京城に来てほしいという悲痛な内容の手紙が届いた。夏休みになるとすぐ京城に行ってみると、姉ふじ子のことで悩んでいるのだった。ふじ子の夫永島は大正 7 年に病死、ふじ子は 3 人の子供を抱えて困窮、母親に助けを求めている。福太郎に援助を頼んだが渋っているののでふじ子を連れてきてほしいと政男に依頼した。ふじ子の顔を見たら福太郎も考え直すだろうと母は期待していた。政男は 12 年ぶりに田口村に戻り、ふじ子と 3 人の子供を連れて京城に帰ったが、福太郎の支援拒否の姿勢は変わらなかった。恐らく、大戦後の大不況で古賀商店の経営が苦しかったのではないだろうか。セツは口論のすえ、セツが田口村へ戻り働いて支援することになった。政男はセツ、ふじ子を連れて再び田口村に戻った。そうして 9 月 1 日、2 学期に備えて上京しようと川口村を出発した。途中列車が止まり、関東で大地震が発生したことを知った。広島で降り、学友の家で世話になって 9 月中旬やっと草刈良介の下宿にたどり着いた。下宿は奇跡的に焼けずに残っていて、心配していたマンドリンは無事だった。

古賀政男と仁川(5)

関東大震災の後、東京に戻ってきた古賀政男は、草刈良介の下宿を出て学友 2 人と新宿区柏木の下宿で暮らし始めた。マンドリンの練習をするにはその方が都合がよかったからと思われる。同室の二人は金持ちの息子であり、何かと助けてもらえるからだった。なにしろ大震災前にはアルバイトが少しはあったが、大震災後は全くなり食費にも事欠く有様だった。

事態が好転したのは大正 13 年 4 月、政男が神田駿河台音楽学院のマンドリン、ギター教師として招かれたからだった。音楽学院は神田すずらん通りにある須賀楽器店が楽器の宣伝のため開設したもので、その主人は明大マンドリン倶楽部をよく知っており、政男の技量を高く評価していた。学院は生徒から月 5 円の授業料をとり、うち 3 円を政男に支払った。政男が教えたのは 17、8 人だったから月に 50 円ほどの収入になった。しかも夕食付だった。1 年ちょっと前の古賀商店でもらっていた給料の 10 倍の金額である。下宿代は月 25 円だったから金銭的に余裕ができ、音楽の本や楽譜を次々と買い込んで演奏方法や作曲技法を独学で学んだ。

明大マンドリン倶楽部は大正 13 年 5 月 31 日に第 1 回演奏会を開き大成功、世間から認知された。政男は第 2 マンドリンのしんがりを務めた。それ以後、年に 3、4 回演奏会を重ねた。

大正 15 年春、政男は予科を終えて商学部に進んだ。そこから政男の信念に基づく行動が始まった。有名になった明大マンドリン倶楽部のメンバーのなかには学問そっちのけで女漁りをする人、金銭にだらしない人が目立ってきた。結婚するなら仁川の草刈春江と決め、他の女性には見向きもしなかった政男には我慢がならなかった。同志を募って改革に乗り出したのである。倶楽部の実権は OB が握っていたから、政男たちの改革の動きは OB 対現役学生の主導権争いになり、「倶楽部は現役中心であるべきだ」と主張した政男たちの勝利に終わった。この結果政男は倶楽部のリーダーになったのである。政男は綱紀肅正を図るとともに演奏技術の向上を目指して部員を徹底的に鍛えあげた。時折コンクールを行い、優秀者にはポケットマネーで賞品を与えるなどしていると、マンドリンの持つ特性を最大限に引き出す演奏ができるようになった。そこでマンドリン・オーケストラを充実させたのだった。

政男は昭和 2 年 7 月、このメンバーを引き連れて朝鮮・京城(現ソウル)に演奏旅行に出かけている。京城在住時代の人脈を活かしたのか京城基督教青年会主催で、ほとんど経費がかからないようにしていた。政男はこの演奏会でカラーチェの無伴奏独奏曲プレリュードを見事に独奏、高い評価を得た。この演奏会は、仁川の草刈春江にアピールする狙いもあったと思われる。

新メンバーによる国内での演奏会は同年の 12 月 3 日、東京赤坂溜池の三会堂ホールで開かれ、政男はロマーノの幻想的狂想曲を独奏、評判になった。

古賀政男と仁川(6)

昭和 3 年(1928)8 月、4 年生になっていた古賀政男は蔵王の麓の宮城県青根温泉に宿泊中、自殺未遂事件を起こした。友人と森の中を散歩していた政男は友人に気づかれぬようにして谷底へと降り、カミソリの刃で首すじを何度か切った。流れ出る血で意識がもうろうとしているときに浮かんだのが「影を慕いて」の歌詞であり、曲だったという。

幻の影を慕いて雨に日に 月にやるせぬ我が想い
つつめば燃ゆる胸の火に 身は焦がれつつしのび泣く

わびしさよせめて痛みのなぐさめに ギターをとりて爪弾けば
どこまで時雨ゆく秋ぞ トレモロ寂し身は悲し

君故に永き人世を霜枯れて 永遠に春見ぬ我が運命
永らうべきか空蟬の 儂き影よわが恋よ

今では誰でも知っている歌詞であり、メロディーである。

政男が自殺を図った原因について伝記や評伝をみると謎だとされている。なかには「暗い世相を悲観した」とか「音楽院の教え子である中島歌子に失恋したため」というのがある。政男自身は自伝の中で「暗い世の中だった」と書いているから、世相悲観説は間違いではないかもしれない。しかし中島歌子への失恋説は完全な間違いである。中島歌子は政男に猛烈なアタックをかけたが、仁川の草刈春江しか眼中になかった政男から交際を断られ自殺した女性である。

政男が自殺を図ったのは「影を慕いて」の歌詞を素直に読めばわかるように、草刈春江との結婚を諦めざるを得ないと覚ったからに相違ない。政男は 3 年の 7 月、明大マンドリン倶楽部を率いて満州への演奏旅行を敢行した。そうして満州に入る前、前年同様京城で演奏会を開いている。その際、京城または仁川で草刈春江に会ったと思われる。そうして春江から仁川税関員との結婚が迫っていることを告げられたと推察される。

恐らく政男は、その縁談は白紙にして自分と結婚してほしいと頼んだことだろう。しかし卒業後、どうやって暮らしていくのか、という春江の問いかけに答えられなかった。世の中は大不況のさなかであり、就職のメドはたっていない。春江も24歳になっており、当時としては婚期を逃すと言われた歳であり春江自身も苦しんだことだろう。春江の兄の良介は銀行員になっており、父の草刈兵衛も娘婿には堅い職業の男をと望んでいたと思われる。

二人が愛し合っていれば結婚できると考えていた政男にとっては大ショックだった。茫然自失の状態であ東、ハルピンでの公演をこなし、帰国直後に青根温泉に静養に行ったのだった。「春江と一緒に成れないのなら死んだ方がまし」と自殺を図ったのだろう。しかし生への未練は残っていた。草刈春江という女性は幻の存在だったのだ、と思ひこむことでこれから生き抜こう、と決断した。そして「影を慕いて」の歌詞が浮かび、メロディーを思いついたのだった。

古賀政男と仁川(7)

仁川の草刈春江は幻だったのだと割り切って生き抜く決断をした古賀政男は、自殺を図った男とは思えないほど学業とマンドリン練習に力を注いだ。昭和3年11月25日の定期演奏会では日本で初めてモーツァルト作曲のオペラ「フィガロの結婚」を紹介、序曲を演奏した。

昭和4年3月、政男は卒業を迎えた。保険会社に合格したものの給料が音楽院のアルバイト収入より大幅に少なかったのでアルバイトを続けることにし就職は見送った。明大マンドリン倶楽部についてはOBとして指導することにした。目の前に迫ってきた6月の定期演奏会の目玉にしようと政男は、ソプラノの人気歌手、佐藤千夜子に直接出演を要請、快諾を得た。そこから運が向いてきたのである。

定期演奏会では佐藤千夜子が「野薔薇」など4曲を歌い、政男たちは「影を慕いて」をギターで合奏した。佐藤千夜子は「影を慕いて」を非常に気に入って「レコードにしたらいいわ。ビクターには私から話してあげる」と言った。約束通り、佐藤千夜子は5年10月、自分が歌った「影を慕いて」を吹き込み、6年1月ビクターから発売された。やや時間がかかったのはギターの名手、アンドレ・セゴビアが来日、演奏会を聞きに行った政男は衝撃を受け、「影を慕いて」に手を加えていたためといわれている。

佐藤千夜子の「影を慕いて」はあまり売れなかった。期待していた専属作曲家の話も来なかった。政男はがっかりし、自信を失っていたが日本に進出したばかりのコロンビアが政男に注目、専属作曲家にならないか、と申し込んできたのである。政男は「自信がない」と断り、社員として雇ってほしい」と返事した。コロンビアは月に2曲を作ることを条件に承諾、月給は120円の高給を提示してきた。教員の初任給が40円の時代である。こうして政男は6年4月、コロンビアに入社した。

第一作の「乙女心」はまずまずの売れ行きで社内の評価があがり、レコード1枚1銭の印税までもらうことになった。「片思い」「風の鈴蘭」も好評だったが次の「キャンプ小唄」が藤山一郎の美声によって爆発的に売れた。さらに「丘を越えて」が記録的な売り上げを達成、古賀政男の名前は知らない人がいないほどになった。「丘を越えて」は明大マンドリン倶楽部の後輩たちと川崎市の稲田堤に花見に行ったときの印象をもとに作曲している。

ちょうどそのころ、政男は銀座を散歩していたとき出張で上京していた草刈良介に偶然出会った。暫く懇談したが、妹の春江は幸せな結婚生活を送っている、と告げられた。「仁川の草刈春江は幻の人」と諦めたはずだったが実際はそうではなかった。良介と別れた後、酒を浴びるほど飲んだ。そうして浮かんだのが「酒は涙か溜息か」だった。

酒は涙か溜息か ころのうさの捨てどころ

遠いえにしのかの人に 夜毎の夢の切なさよ

酒は涙か溜息か 悲しい恋の捨てどころ

忘れたはずのかの人に 残るころをなんとしよう

藤山一郎が歌ったこの歌はミリオンセラーになったのだった。

古賀政男と仁川(8)

古賀メロディーが日本中を席卷し始めたのをみたコロンビアは昭和 7 年 2 月、藤山一郎が歌う「影を慕いて」を発売した。思惑どおり空前の大ヒットになった。古賀政男は複雑な思いに駆られたに違いない。仁川の草刈春江は幻の存在だったのだと割り切って生き抜く決断をしたのに、その春江のお蔭で作曲家への道が開かれ、「影を慕いて」と「酒は涙か溜息か」の大ヒット曲を生むことが出来たのである。春江は幻の女性どころか、恩人であり女神のような存在になったのだった。

古賀政男は昭和 7 年 12 月、山田耕筰の仲人で中村千代子という音大出の女性と結婚した。しかし 10 ヶ月で離婚している。恐らく、政男の心の中では春江以外の女性と結婚した自分への罪の意識があり、それが相手にも伝わって破綻したのではないだろうか。離婚後「古賀政男はホモ」とか「インポ」という噂が流れたのもその辺の事情を物語っている。

結婚話が持ち上がってから結婚、そして離婚、肺浸潤を患い伊豆の伊東での静養と続いた 2 年余、政男はスランプといってもいい状態だった。恐らく心の整理に手間取っていたのではないだろうか。いつまでも消えない草刈春江の面影、そのなかで他の女性とどう接触していくのか悩みがあった。そうして得た結論は「もう結婚はしない。春江への恩返しのためにいい曲を作ろう」ということだった。

昭和 9 年 5 月、政男はコロンビアと手を切り、関西の小さなレコード会社テイチクの経営者兼専属作曲家に転身した。「コロンビアは病気見舞いにも来ない冷たい会社だったから」と政男はその理由を語っているが、心機一転やり直そうと思ったに違いない。

最初は苦しんだがやがて楠木繁夫、ディック・ミネといった新人歌手を発掘、「緑の地平線」「二人は若い」「人生の並木道」で経営を軌道に乗せた。そうして昭和 11 年、大金をはたいて藤山一郎を招き入れた。古賀-藤山コンビの復活である。「東京ラブソディー」「青い背広で」「男の純情」が次々ヒット、古賀メロディーは黄金期を迎えたのである。霧島昇の「誰か故郷を思わざる」もヒットした。しかし戦局が進むにつれてテイチクのオーナーは軍国主義を強めるよう政男に要求、政男はテイチクを退社、コロンビアに復帰した。

戦中から戦後にかけての古賀政男は、作曲への意欲を失っていたようである。しかし進駐軍の兵士何人かがわざわざ訪ねてきて「東京ラブソディーは素晴らしい。作曲した人に会いたかった」と言われ創作活動を再開した。

近江俊郎による「湯の町エレジー」を皮切りに、神楽坂はん子の「芸者ワルツ」「こんなベッピン見たことない」、島倉千代水の「りんどう峠」、村田英雄の「無法松の一生」「人生劇場」、三波春夫の「東京五輪音頭」、美空ひばりの「悲しい酒」「柔」とヒット曲のオンパレードである。

古賀政男は昭和 53 年 7 月 25 日、74 歳で死去した。生涯に作った曲は 4000 曲とも 5000 曲とも言われ、NHK 放送文化賞を受け、国民栄誉賞も受賞した。それでいていつも「俺は寂しいんだ」と言っていた。仁川の草刈春江に捧げた孤独な人生だった。

宮城道雄と古賀政男

時期はやや異なるものの同じ仁川・寺町に住んでいた宮城道雄と古賀政男。二人の間に交流はあったのだろうか。東京都渋谷区上原の古賀政男音楽博物館に尋ねてみると「二人だけで撮った写真が残っています。また映画の新妻鏡で

は二人で共演しています」という。かなり親しい関係だったようだ。

古賀政男が音楽に目覚めたのは草刈良介からもらった大正琴によってだった。演奏方法を学ぶうえで琴の奏法を知る必要があり、二兄の嫁から手ほどきを受けている。仁川から京城に居を移した大正 3 年は、宮城道雄が京城で盛んに演奏会を開いていたころであり、古賀政男も聞きにいったはずである。

宮城道雄が唱えていた「邦楽と洋楽の融合」に賛同していたフシがある。三味線、尺八、琴の音を入れた曲を多数作っているのはその証左といえるだろう。古賀政男の場合は邦楽、洋楽のほかさらに韓国の音楽が加わるべきと考えていたかもしれない。

古賀政男が宮城道雄に親近感を抱くもう一つの理由があった。二人とも音楽学校を出ていないということである。古賀政男は音楽学校出身の作曲家や声楽家から「音楽の理論に適合していない」としばしば批判され、蔑まれていた。「だったら君たちはもっといい曲を作ってみろ」と反論するけれども学歴偏重の日本では無視されることが多かった。その点で宮城道雄は仲間だった。

ところで仁川に住んだことのある二人の作品に仁川を表現したものがあるだろうか。宮城道雄の「春の海」のほとばしるような喜びの表現は、瀬戸内のような温暖な気候ではなく極寒の冬から一気に暖くなる仁川の春の海の印象が込められているだろうことは先に書いた通りである。

では古賀政男はどうか。古賀政男は「ご自分の作られた曲のなかで一番好きな歌はどれですか」と尋ねられると必ず「月の浜辺」と答えたといわれる。「酒は涙か溜息か」と同じ昭和 6 年の作曲で、作詞は島田芳文だが、政男が作曲の意図を細かく説明したはずである。歌詞をみてみよう。

月影白き波の上 ただひとり聞く調べ告げよ千鳥

姿いずこかの人 ああ悩ましの夏の夜

こころなの別れ

月はやかげり風たちぬ われすすり泣く浜辺語れ風よ

姿いずこかの人 ああ狂おしの夏の夜

永久(とこしえ)の別れ

月永遠(とわ)に落ち波たちぬ 胸あやしくも乱る返れ心

姿いずこかの人 ああさびしやの夏の夜

一人泣く浜辺

草刈春江から別れを告げられた直後、仁川の浜辺をさまよい歩いた古賀政男の姿がいきいきと描写されている。場所は仁川神社と日本公園の下の浜辺か月尾島近くと思われる。

古賀政男は死ぬまでこの日のことを忘れなかった。作品には悲しい歌が多いといわれるのもうなずける。